

を慕ふて、彼女に結婚を申込んだレキンといふ男を拒絶して居た程であつたのに、今ウロンスキーの變心を見てキッチ嬢は悲嘆に暮れ且つ恥かしさの餘り、身體に衰弱を來たす。醫師の勸告に従つてキッチは外國へ保養に行く。斯かる間にアンナはペテルブルグへ歸つてウロンスキー伯と同棲することになる。兩人の關係は世間に知れ渡る。アンナは後にウロンスキーの種子を宿して女兒を分娩する。産後アンナとウロンスキーは外國へ旅行する。外國漫遊に飽き果てて露國へ歸る。而してウロンスキーの家に住居する。ウロンスキーはアンナを離縁しやうと苦心するが、其計略は駄目であつた。實は外國漫遊中にアンナは夫ウロンスキーの愛情を疑ふやうになつて居たのだが、斯うなるとウロンスキーが以前の如にはアンナを愛して居ない様子が益々明瞭に信ぜられる。到頭アンナは夫に復讐する積りで汽車に轢かれて死ぬる。ウロンスキー伯は悲嘆と悔恨の情を忘れんが爲に露土戦争に出征する。

レキンはキッチ嬢から拒絶を受けたので自分の所有地に歸り、家政に従事して失戀の煩悶を遣らんと努めて居る。レキンの所有地に程近い處にオブロンスキーの妻ダーリヤ・アレクサンドロヴナ（キッチ嬢の姉妹に當る）の所有地が在る。此の地に夏アレクサンドロヴナが子供を同伴して來る。其時外國に保養に出掛けたキッチ嬢は健康に復して歸つて居る。而して姉妹の招待に應じて夏の末方彼女の領地へ來る。レキンはキッチが來た事を聞き知る。キッチに對するレキンの愛は未だ冷めて居ない。レキンはキッチの許へ行つて見度いと思ふけれど、會へば胸を痛めるばかりであるから我慢して行かない。

冬にレキンはオブロンスキーの宴會に招かれてモスクワへ來る。此處でレキンはキッチから拒絶を受けた以來初めて彼女に面會する。此會合は兩人に好結果を齎らす。レキンは改めてキッチ嬢に結婚を申込む。キッチは快く承諾する。兩人はモスクワで婚禮を擧げてレキンの家に歸る。

レキンとキッチは平安に且つ幸福に生活する。たゞレキンは人生問題の爲に苦しむ。キッチも同じく苦しむ。終にレキンは人生問題に就て満足な解決を得て始めて安心し、妻と共に子供の養育に身を委ねる。

二

アンナ、カレニナは待種の性質を有する女で、彼女は愛を守本尊として居る。彼女の愛は義務の觀念にも宗教の教にも恐るゝ所が無い。彼女の愛は恐怖すべき復讐的の愛で、他からの侮辱を許さない。作者トルストイは斯の愛の経過を吾人に描き示すに巧妙を極めて居る。アンナが全く社會と遠ざかつて居たのも愛の影響である。彼女は愛のうちに生活して、嫉妬強く愛を守護して居る。アンナはウロンスキーの爲に總てのものを犠牲に供した。自分の兒も、位置も、精神の平安も。然し其代りに對手のウロンスキーからも總てのものを要求した。彼女は社會に對するウロンスキーの關係、職務、事業、以前の愛着、興味、

彼の生活其物までも嫉妬の眼を以て見た。彼女はウロンスキーに向つて彼が彼女に約束した愛を一心に守らんことを望んだ。諸種の習癖、希望、思想を有するウロンスキーもアンナの爲には愛の塊に過ぎない。で、此の愛は當にアンナ一人の上に集注さるべきだと彼は考へた。

然るに此愛が減じた。夫故に愛の冷却は確かに彼の愛の一部分が他の人、若くは外の婦人に移つた證據であると彼女は斷定した。そこで嫉妬の焰に燃えた。其結果は即ち悲慘の最後となつたのである。

レキンは一面から觀れば作者トルストイ自身に外ならぬ。故にレキンの性格研究は吾人に向つて頗る意味がある。人生問題に頭を悩ましたレキンの經歷は是れ即ち數十年に亙れる作者トルストイ自身の内面生活を描寫したものである。レキンは深刻な性質の人で、又特種の性格を帯びて居る。レキンは普通の人とは毛色が異つて居る。彼は人生問題の解決を獲やうと熱中する。彼は何人

であるか、何故に生きて居るか、何事を爲すべきか、之等の大問題に對する満足なる解決を發見しやうと熱望する。世間一般の人生觀即ち科學や哲學では満足し得ない人である。レキンは哲學に精通して居るけれども哲學はレキンに向つて人生問題の解決を與へ得ない。後に彼は或る知己の百姓が、人間は神の爲に、靈魂の爲に生活せねばならぬものであると言ふたのを聞いて感に打たれた。此獨斷的な宗教の意見に由つて一先づレキンは心を安ずる。が、其後に於けるレキンの内面生活は如何に成行つたか、小説には之に就いて書いてない。

ウロンスキーは立派な士官で、此小説では最も純粹な貴族主義者<sup>アリストクラツシズム</sup>として現はれて居る。個人としては彼は大に人の同情を惹くに足る溫厚、誠實の良性質を有して居る。故に讀者は彼に向つて同情せざるを得ないやうになる。

作者トルストイはカレニンを以て露國官僚政治家の模型人物を描かんとして居る。カレニンは多くの徳行あるにも拘らず、吾人は彼に向つて冷淡で敵意

をさへ抱かしめられる。

## 五 態度、文章

一度び伯の作品、其の如何なる物を手にした者でも直ぐ其れと氣附くのは伯の文章のくどさ加減である。結んでは開き、開きては結んで分り切つた事を幾度となく繰り返す。其れでゐて作者自身にはまだ『十分言ひ現してない』と云つた風の不満な所が見え、また作品の内にもちよゝく作者の不満心が顔をのぞいて、断えず出て来る。もちつと簡潔に、今一層適切に表白出来さうな者だと思はしめる。文章として部分的に美があるでなく人を刺す如き尖點にも乏しく、潤澤もない。一言以てトルストイの文章を評すれば廻りくどいと云ふのが最も適切であらう。だが緻密なる思想を論理的に運び、心内生活の表白が如何にもサイコロチカルな點などは他の作者に多く求められぬ特長だ。其れ故トルストイのは作全體を讀了してから後ち始めてまとまつた文藝上の情味感想を得

るので、局部々々の美に打たれて、吾知らず讀み耽らすと云つた方の作物とは大に異ふ様だ。この點の好く似て居るのはドストエフスキイである。寧ろ、一頁又一頁と讀み行くは精力に乏しい讀者には苦痛で、時として倦怠の情すら喚び起さすと云ふ位である。だが全篇を讀破した時の感味は部分々々で刺激された力よりも、根強く人の胸に入るやうである。と云ふのは、文章上の技巧に非らずして、作者自らが偽りなく飾りなき熱烈な赤心を吐露し、表現した、謂ふ所の心熱の移植によつて、動かされるのであらう。翁の一言一句の内にも、翁自身の心臓を脈うち流れる鼓動が傳つて、吾等の心に反應するのである。文章の爲めに文章を作らずして、自己抱懷の心熱の移植に忠實嚴肅なる翁の態度は尋常文人と異るところであらう。

露西亞文豪の中でもピセムスキイの文章は強い色彩で畫かれた芝居の書割見たやうでツルゲーチフの文章は自然と人工とを巧みに調和したやうな花園を見

る氣がする。ガンチャロフの文章は全體の輪廓も部分の委曲も共に濃厚な色彩を以て描いたルーベンスの畫を見るやうで、シチエドウリンの文章はボツリボツリと斷々に響く罵詈を聞くやう。ドストエフスキの文章は含蓄的の熱情が籠つて居る。然し是等をトルストイの言葉に比べて見ると全體の印象が淺いやうな心持がする。トルストイの言葉の蔭には心臟の鼓動が轟々と感じられる。伯の詞藻は極めて卒直な言ひ現はしではあるが、其の描寫と共に驚く可く精確で、物語の各部の組織配列に於ても凡ての激情を離れて、一點の虚偽をも許さないものである。伯の物語は大抵史傳體に出来て居つて、同時に讀者をして最初より物語の大團圓に達す可き一筋途を辿らしむるやうになつて居る。そして其の大團圓のうちに物語の主なる目的と内面的意義とを含蓄させると云ふのがトルストイの行き方である。トルストイの作物は大抵或る全稱命題若しくは或る格言から始まつてそれを源として平原の中を靜かに流るゝ河の如く、次第に河

幅を擴げながら、其の透明なる水面に、絶えず高天の影と深き水底とを反映して居る。

## 六 杜伯と内外文豪

千九百八年、伯の八十回誕生日に際して、セルゲーエンコの編纂の下に、内外諸文豪のトルストイ評と言つたやうなものを集めて出したことがある。其中に各文豪の眼に映じたトルストイ伯の面影が種々に現はれて居る。今其重なるものを茲に採録して見やう。

開卷壁頭我が徳富蘆花氏の挨拶が載つて、『博愛人道の老戰士に満心の敬意を表す』と言つたやうなことが書いてある。次に米國の閨秀哲學者リューシ・マラーは先づトルストイ伯を『現代の師表』と稱して、『彼の力は愛の力である。叡智の力である。彼は世に不滅の名を荷ふべき唯一の文豪である』と言つて居る。佛國の歴史家オーラルは佛蘭西革命に關する著書で名高くなつた人であるが、トルストイに關して『現代の人類は伯の著作に依つて心より驚動せられた』

と言ひ、諾威文豪ビョルンステル・ビョルンソンは『初めて伯の處女作を讀んだ其瞬間から全く伯の崇拜者となつた』と告白して『リョフ・トルストイは未來に於ける光明なる露西亞の籍身である』と言ひ、和蘭のメイロングは伯を『人類史上の偉人』と稱して『彼は偉人として生れ、又其の生涯の各時期に於ても、述作の各篇に於ても偉人として現れて居る』と言つて居る。伊國小説家フォガツァロは伯を目して『十九、二十の兩世紀が誇り得べき最も卓越せる文豪である』と讚し、佛のマルセル・プレヴオは杜翁を『時代精神の創建者であり、新センチメンタリズムの開祖である』と讚嘆して『彼は佛國文學史に於ける偉大な事實である』と、宛も杜翁が佛國の文豪でもあるかの如く述べ、ヤンデウールは伯を以て『露國の有ゆる國寶の壊れた中に唯だ一ツ残れる最後の國民的寶物である』となし、露の批評家ローザノフは伯を『我世のモンブラン』と稱して『余はヤスナヤ・ボリナに於て伯と別るゝに臨み思はず其の貴き手に接吻した』

と結んで居る。

此外祝典當日の露國の新聞雜誌に散見せる評論のうちには多くの見通がす可からざる見解も現はれて居たが、私の見たうちにも波蘭文豪ヘンリック・センキーウキチの評論として斯んな文字があつた。『トルストイは露國創作界の森林中に最も高く秀でたる一本松であつて、加之も露國の土地に於て初めて成長し得べき唯一の喬木である。其の梢には露國の歴史的乃至社會的生活の各時代が鮮やかに印せられて居る。何れの國に於ても文學は生活の花であるが露西亞ではそれが生活の叫びである。殊にトルトイの號叫には國家を震動せしむる反抗の聲が響く……。彼は佛のルーソーにスラヴ種族の神祕主義を加味したやうな型の人である。彼は偉大なる藝術家たるの可能を有しながら自分では寧ろ使徒たらんことを望んで居る』。それからオフシャーニコクニコフスキーの説に『トルストイ伯に於て、藝術的創作は神より與へられたる天才の無意識的光明

を放つて居るが、伯の宗教的見解は故意に考へ出されたる人工的の性質を帯びて居る』と云ふやうな點もあつた。最後に莫斯科新聞社會で有名なツルベツコイ公の説を照介して置く。『リョフ・トルストイ伯は全人類を刺激すべき問題を發表するの可能を有し、人間の隠れたる悲喜哀歡の情緒に深く徹底して其の必然的結果を洞觀するの能力を備へて居る。伯の創作力の廣いのも、人類学的なもの、切實なもの、譴責的なもの皆な是れより生ずる結果である』と。其の他コロレニコなども伯の説には全然賛成は出来ないが、然し、伯が露國及び全人類に與へた功績と精神的感化とは何人も認めざるを得ないと云ふやうなことを言つて居る。

又埃太利の或る新聞社は同じく伯の八十回誕辰祝典に乗じて『トルストイより受けし影響』と云ふやうな事に就て歐羅巴諸文豪の答案を求めて、それを祝典當日に發表したことがある。先づ最初に答へたのはカルメン・シリワと云ふ

雅號の下に西歐文壇に響いて居る有名なルーマニヤの女王エリサベタであるが、此の閨秀詩人の答案中に斯んな事が書いてある。『トルストイ伯の著作の中で妾に最も深い印象を與へたのは重に短篇物です。其の形式の完全に整つて少しのゆるみもなく、美しく出来上つて居る所は實に驚嘆の外はありません。然れども翻譯でばかり読んで居る妾共はトルストイ伯の天才の此方面を満足に評價すると云ふ事は出来ないのです。翻譯は如何程完全に出來たにした所で、何うせ翻譯ですから原書の文體は自然壞されて了ひます。雖然、何んな翻譯でもトルストイ伯の短篇物の内面的の美を壞すと云ふ事は出来ません。是等の短篇物語には深い感情と、ゆかしき敬慕の念と、切なる愛情とが籠つて居まして、心を引かるゝ所が多いものですから、不斷繰返しては萬遍なしに読んで居ますが、讀む度びに新しい意味と新しい美が発見されます。ですから妾は毎晩寝る時には伯の短篇物語を枕頭に備へて置いて、眠られない夜などは何時まで

もく／＼それを讀んで是不眠の苦痛を忘れて居るのです……。人が能くトルストイの長篇ばかり擧げて短篇の方は何とも言はないやうですが、妾には其意旨が少しも了解りません。妾は却て『二老人』とか『人は多くの土地を要するや』と云ふやうな短篇を擧げます。是等は聖書と同じく不滅の作です。是等の物語には基督教の道德が最も純粹な理想の形に於て示されて居ります。若しトルストイ伯が長篇を止めて斯種の短篇ばかりに筆を染めましたら永久に偉い文豪となるでせう。次にアツポニー伯はカルメン・シツワ女史に反して『アンナ・カレニナ』と『戦争と平和』を伯の傑作として最高位に置いて居る。然し伯の宗教的作物に關してはアツポニー伯は餘り善く言つて居ない。獨逸の有名な閨秀作家エレナケイ女史も藝術家としてのトルストイを無上に讚美して居るが、伯の宗教的乃至哲學的教義に對しては消極的の態度を取つて居る。英國の文豪ペテル・ロゼゲールは現代の基督教社會の迷霧を一掃した點に於てトルストイ伯の功績



を非常に推稱して『トルストイは現代の文明が基督教的性質を没却せること、同時に現代の基督教が非文明的なることを明示した』と言つて居る。獨逸の有名な藝術家フランツ・シュトックは、藝術家としてのトルストイよりも道德家としてのトルストイが遙に強大な個人的感化と深き印象とを彼に與へたと言つた後、伯の傑作として『暗の力』を挙げた。最も振つて居るのはウエデキンドの答案で彼は、『アンナ・カレニナ』を『ドン・キホーテ』以後世界文壇に現はれた最も顯著なる傑作と數へて、偕て言ふには『イブセンの死後トルストイは唯一人現代の最も偉大なる文豪として取り遺された。余はトルストイ伯を露國に於て獄中に繋がれざる者の中より最も注意に値すべき唯一の人物だと思ふ』と如何にもオルヂナルに結んで居る。

世界文壇に於けるトルストイ伯の地位并びに勢力は以上の片言短句のうちに言ひ盡されて居ると思ふ。

## 附 錄

一 近 什 二 篇

一 田園の歌

歌の聲も拉琴の音も、近い様ではあつたけれども、霧の中で何とも聞きわけ難かつた。別に祭日と言ふ日でもない。だのに朝から歌を聞いて私は少々驚いた。『きつと何だらう、新兵が送られて行くのだらう』とかう私は、此村から五人の若者が聯隊へ送られる事になつてると言ふ、四五日前に誰かから聞いた話を思出して、思合せて、嫌應なしに自分を引つける面白げな歌の聲のする方へ行つて見た。私が其方へ近寄つて行くと、歌と音楽は丁度止んで送られて行く新兵の歌ひ手共は、連中の一人のお父さんの石造の二階建の家へ入つて行つた。其戸口の所には、お婆さんや若い女や子供の群が一かたまり立つてゐた。私

其女達に、新兵の誰であると言ふ事や、どうして此家へ入つたのかなど、訊いてゐる間に、其若い人達が、自分の姉妹に送られて入口の所に出て來た。彼等の數は五人であつた。其中一人丈が妻帯者で、後は皆獨身者であつた。

吾々の村は、此五人の新兵達が働いてゐた街から餘り遠くなかつた。五人はサツパリとしたよそ行きの着物を町風に着て、新しい帽子を被り、立派な長靴をはいてゐた。

中に、生々とした快活なちよんぼりとした顎鬚のあるよく光る黒い眼を持つた特色のある顔附の中背の若者があつたが、其若者は、通りへ出ると直ぐ、肩にかけてゐた大きな奇麗な拉琴をとつて、私に一寸頭をさげて、絃の上に指をかけて、『奥様』と言ふ調子のいゝ小唄をはじめた。そして足拍子をととり乍ら通りをずうと歩いて行つた。

それと並んで、矢張中背の髪の美しい若者が行つた。

此男はさも豪さうに通りの兩側を眺め廻して、そして音頭取が聲を止めるとうまくそれを引繼いだ。是が女房持ちであつた。二人は段々進んで行つた。後の三人は矢張同じ様に着飾つて其中の一人が馬鹿に背が高かつたと言ふ外は別に目立つ事はなく其後からついて行つた。

私は群集と一緒になつて、其若い人々の後について行つた。彼等のうたふ歌は、どれも是も皆面白げなものであつた。そして彼等の顔にも何等の悲しい様な影はなかつた。が彼等が、同じ様にして彼等を待つてゐた次の家の傍へ來て其處に立止ると、いきなり、女の泣聲が聞えた。何と言つたかそれはよく分らなかつたが、『私の死が……お父さん達……お母さん達……生れた村が……』など言ふきれ／＼丈が僅かに聞こえた。そして一言言つては泣き、大きな溜息をついては呻いて、終にはヒ、ヒ、と言ふヒステリー的な笑聲を立てた。此人達は送られて行く新兵の母や姉妹等であつた。親身のもの、涙や悲しみの聲の中に、

他人のそれを慰める聲が聞えた。

『まあ〜さう泣かつしやるな、や、ちつとんべいはお氣を落つけなされ』と泣くのを止め様として一人の女が言つた。

二

若者達は家へ入つた。私は通りに残つて、知合の、以前に私の生徒であつた、ワシイリー・アレホーヴィと言ふ百姓と話しをした。五人の新兵の中の一人、女房持ちなのが其男の息子であつた。

『どうだね、矢張悲しいかね?』と其男に私は問うた。

『そんな事言つたつてどうなりますべし。悲しいとつて悲しくねえとつてはあ、矢張やらねえぢやなりませんねえもの……。』

そこで彼は私に身上の打明話をし出した。彼には息子が三人ある。一人は今家にゐる。も一人は今聯隊へ行かうとしてゐるそれで、後のは他國へ出かせぎ

に行つてそこから某かのものを家へ送つて来る。實を言へば今日出て行く先生は餘りよく働かない。

『彼の噂はまあお前様、その街から来たんだもんで、どうも家などの様な働き仕事には向きましねえだ、こんな事はまあ大した事ぢやムりましねえがの……あれもはあ自分の糊口位は自分でかせぐがえ、でさ。私には何だかあれが可哀さうでなりましねえが、それかとつてどう仕様がムりませう!』

さうして話してゐる中に、若者共はもう其家から出て来た。そこで又啜泣さやら泣聲やらヒステリカルな笑聲や慰め言などが再び起つた。

戸口の所で五分間許りを過して、五人は先へ歩き出した。先刻の男は又うたつて拉琴をひきはじめた。彼は自分の弾く音と調子に有頂天になつて了つて盛んに足拍子をととり乍ら、時々ふつと聲を途切らせては又新たに快活な聲でうたひ上げて、優しい黒い眼を彼方へ向け此方へ向けした。

實際其男にはほんとうの樂才があつたのだ。私は其の男の方許りを見てゐたが、ふと視線が打付かると、少くとも私丈には、彼が少々まごついた様に思へた。彼は眉を上げて傍を向いた。そして新たにふるえる聲をととのへた。

皆が最後の五番目の家へ近づいて、其家へ入つた時に、私も其後からついて入つた。彼等は皆酒とパンの並べられたテーブルの前に座つた。先刻私と話をした此家の主人が酒をついだ。若者達は餘り飲まなかつた。やつと四ツ杯があげられた許りであつた。其内にはほんの唇をつけた丈のものもあつた。女はパンを切つて客にすゝめた。主人はテーブルを歩きまはつてコップに酒をついで廻つた。私が新兵達を見てゐる間に、私の傍の二階から、見なれない風をした女が一人下りて來た。其女は光つた緑色の今流行の絹物らしい着物を着てかゝどの高い女靴をはいてゐた。美しい髪は流行のかたに結ばれて耳には巾廣の金のリングが下つてゐた。此女の顔は別に悲しさうでもなく嬉しさうでもなかつた。

何だか茫然とした容子をしてゐた。彼女は新しい其かゝどの高い女靴をコップツ言はせ乍ら下りて來て、若者の方は見向きもせず又影へ入つて了つた。

此女の凡ての物——其着物、不満らしい顔附、それから何よりも先づ此耳輪、是等のものが、此女は一體何者で、又どうして此ワシイリーの家の二階に出て來たか一寸私には想像もつきかねた程、あたりの様子とそぐはないコントラストを作つてゐた。

そこで私は、隣りに座つてゐる女の人にそれを聞いた。

『あれは、お前様、ワシイリーの嫁でムえますだよ。もとはその奉公人でムえましたゝがのう。』と其女の人は答へた。

主人は三度目酒をつがうとしたが、若者達はそれを辭つて、席を立つて、お祈りをして、それから主人に禮をのべて路へ出た。

通りへ出た所では、又啜泣きと泣聲とが起つた。若者達の後から外へ出乍ら、最初に聲を上げて泣き出したのはもういゝ年の腰の曲つた婆さんで、其聲には深い悲しみが潜んでゐた。婆さんは傍の人が止める隙のない程、大きな聲で泣き立てた。人々は泣き立てる婆さんをしつかり手で押えた。婆さんはあり丈の力を出して前へ出よう／＼とした。

『一體あれは誰だ』と私は訊ねた。

『ワシイリーのお袋での、あれの婆さんでムリますだよ。』

と突然に其婆さんは握つてゐる女達の手をぬけて、ヒステリカルな聲で笑つた。五人はずん／＼歩いて行つた。歌の聲と拉琴の音が又聞えた。

村盡れへ來ると、其處には五人を軍隊へ送つて行く農用馬車がちやんと仕立てられて待つてゐた。皆はそこで立止つた。啜泣と泣聲とはもうすつかり止んでゐたが、拉琴をもつた若者は益々盛んに面白げにかきならした。頭をわきの

方へまげて、全身の重みを一方の足に托して一方の足では、彼の手が拉琴から微妙な音を出す度に調子づいて拍子をとつた。高い、嬉しげな、生々したワシイリーの息子の聲が其男の歌に合した。さうして、老人も若者も、わけて其まはりに輪になつて集つた子供達も——私も其中にゐたのだが——誰も彼も歌ひ手から眼を放たず、其男をほめそやした。

『おん畜生。馬鹿にうめいぞ！』と百姓の一人が叫んだ。

『囀る／＼、どうもおつたまげた囀ぶり様だ。』

丁度此時に、其歌ひ手の方へ新兵の中の一番背の高い男が大股に近よつて、一寸頭を下げて何事か其男に話した。

『何と言ふ頑丈な男だらう！』と私は思つた『あれはさつと歩兵にとられるに違ひない。』

私は彼を知らなかつた。

『あの立派な男は一體誰です？』かう私は、私の方へ近寄つて来た背の低い爺さんに訊ねた。

老人は私を見ると帽子をとつておじぎをした。が私の言つた事は彼には聞えなかつたらしい。

『何と仰しやりましたか？』

最初は一向氣がつかなかつたが、かう聞くが否、私は直ぐ思出した。此男はよく働くスラヴの百姓で、かう言ふ事はよくある事だが、此男も續け様に不幸に出あつた仲間の中で、馬が二疋盗まれたかと思ふと、直き其後で家が焼け、其後で又家内が死んだ……久しくあはなかつたのだから一時には思出せなかつたが、私の記憶にはプロコフィーと言ふ中背の髪のおかい人があつた。が、今私の前に立つてゐる人の髪の色は灰色で、うんと背の低い男だ。

『あゝ、お前はあのプロコフィーだつたね。』と私は言つた『今私が尋ねたの

はな、ほらあのアレクサンドルの傍へ行つたあの男、あの丈夫さうな男は誰だと言つて聞いたんだよ。』

『あの男と仰しやるだの？』と背の高い若者の方に頭を掻けて、プロコフィーは訊直した。

彼は身體を動かして何か分りにくい事を呟いた。

『あの男はな、何所の息子だと訊くんだよ。』かう私は彼の顔を見て繰返した。

彼は顔をゆがめて、頬をふるはせて、

『あれは私の忤なんです。』かう言つた。そうしてくるつと傍を向いて、兩方の手で顔をかくして、子供の様に泣き出した。

『あれは私の忤なんです。』此言をプロコフィーが言ふや否、私は單に智識で許りでなく此記憶すべき霧の朝に私の前に起つた凡ての怖しさを自分の全身で了解した。

私が其目撃者であつた凡ての特殊な不思議な不可解な事實は、それが簡單なだけに、私に取つて怖しく明らかな意味を持つて居た。私は、自分が此事をまるで面白いものでも見る様に見てゐた事を思ふと、燃える様な恥しさの念に堪へない。私は、其處で立止つた。そして悪い事をしたと思ひ／＼家の方へ歸つて行つた。(一九一〇年夏作)

## 二 村の三日(斷篇)

此頃近在の村々でよく新奇な、今迄見たことも聞いた事もないやうな出来事が起る。戸數八十の餘の居村にも、毎日のやうに六人から十二人位迄の、饑ゑ凍えて襤褸々々の着物をきた旅人が、夜の宿を求めに彷徨いて来る……。

私の寓には毎日十人から十五人位寄つて行くがその中には眞個の乞食もある。如何なる事情で斯様な生活の方法を取つたのであらうか、自ら袋をさし、着物を着て履を穿いて、さて世界順禮と出掛けるのである。斯かる人々の中には盲人もある、手なし、足なしもある。稀には小兒も婦人もある。

併し今時の乞食の主なるもの、これは袋などを下げぬ物乞の旅人ともいふべきで、大抵血氣な若者で不具者などは無い。その外貌は慘澹たるもので、裸足、裸體、瘦せ衰へた身體は寒さに震へて居るのである。



試みに彼等に何方へ行くやを尋ねて見給へ。答はいつも一つで、『仕事を探しに』とか『仕事を探しても見つからぬえで、家へ歸つてゐる所です』とか。かういふ連中の内には追放されて歸るのも少くない。

此等の大勢の乞食の群には、それ／＼異つた特性が有るから面白い。一見して酒飲だな、酒のお蔭でこんな様に落魄れたのだなと思はれるの、立派に學問のあるの、おとなしいの、羞しがりの、かと思へば反對に物憂げなの、物慾しがりの、種々ある。

先日の事目を醒ますや否や、イリヤ・ワシーリエヴィチが言つた。

『玄關の所に乞食が五人來て居ますが……』

『テーブルの上にあるから持つて行け。』

イリヤ・ワシーリエヴィチは定め通りの五カペイカ宛與へる。一時間ばかり經つて、私は玄關に出て見た。と其處には恐しい壊れた靴を穿いた、汚えぬ顔

の小男が、落付かぬキヨロ／＼眼を動かさせ乍ら、ビョコ／＼お辭儀をして身元證明を差出す。

『お前には遣つたらう？』

『旦那様、けれど五カペイカやそこいらあなた何うしませう？まアワツしの身にもなつてみておくんなせえ。一寸と覽なせえ旦那、一寸と覽なせえましわしの風體を——何うすることも出來ぬえぢやありませんか、旦那（一言々旦那であるが、顔には何やら憎々しさが見える）何うしたら可いでせう、何うしたら着物でもきられるんでせう？』

私は誰にでも同じやうに施しするのだからと言つても、何うか身元證明を一讀して呉れと言つて、乞うて止まない。私が拒むと膝を折つて頼む。私はほとほと困じ果てた。

『あゝあわつしはかうして追ん出される外に能はぬえ、何うも斯うも出來ぬえ

や。』

私は終に二十カペイカを與へた。彼はさもなく腹立たしいといふ様子で立去つた。

斯ういふ手合は特別にしつこくて、金の多い家で無心をするのを、當然の權利と心得てゐる。此等は大抵皆讀書き位は能き人達で、中には革命にあづかつて功のあつた、立派に教育のある人もある。彼等は普通の老耄乞食とは類を異にして、富家の人々をば慈善を以つて自分の魂を救つてくれる、有難い救ひ主など、は見ない。それ所が強盜、追剝、労働の生血をすゝる人鬼だと迄思つてゐる。

斯かる種類の乞食は自分では決して働きもせず、反つて仕事を避けてゐるが、労働者の爲めにはこの人民の追剝、即ち富豪を憎みたい丈け憎むのを、權利どころか義務だと迄思つてゐる。それ故彼が下さいと願ふ時、出せと要求しない

ならば、それは單にそんな振をしてゐるばかりなのである。

斯様な人物はおまけに飲んだくれで、自分こそ大罪人ぢやないかと言つて遣り度くなるやうなの計りだが、この漂浪兒の中にも全く別種の人も少くない。

克明で、柔和で、物悲しさうな人、然し此人々の境遇を考へると恐しくなる……。

『如何に吾人の文化が強固に見ゆるとも、その中に既に破壊的精力は養はれつつあるなり。』これはヘンリー・デョージの言である。『曠野にあらず、森林にあらず、都市の一隅、大道の唯中に於いて、古き匈奴とザンダルの如く吾が文明を破壊せんとすなる、彼の異國人は生ひ立ち行くなり。』

然り、二十年以前にヘンリー・デョージの預言したる所ものは今到る處吾人の眼前に展開しつゝある。而もその最も明かなる例證は吾がロシアではないか……。

デョージの豫言したザンダル（文明破壊者）は、ロシアでは既に全く準備を

と、のへて了つた。此の歴史に歌はれたワンドルの人々が吾が深き文化の域に達したる——かういふと少々奇妙に聞えるかもしれぬが——國民の中でも特別に恐しい。此のワンドルが吾人にとつては特別に恐しい。何故と言へば露西亞人には忍耐といふものがない。禮儀を守ることを知らぬ。而して歐洲各國間に勢力ある輿論に従ふことを知らぬ。露國民の有してゐるものは、眞の宗教的性情でなければ、如何にしても自ら制することの出來ぬ資質である——見よ幾多のステニキ、幾多のラジシ、幾多のブガチエフを……。

あゝ、言ふも恐ろしい。此のステニキ、エメリキの軍は次第々々に増加して行く。これ偏に吾政府が愚なる警察の力、追放、牢獄、徒刑、禁錮、毎日の如く行はるゝ死刑の執行等の脅嚇手段をもつて事に處するからである。ブガチエフの亂も實にかくの如くであつた。(一九一〇年九月作)

## 二 寓意物語

### 一 細い絲

或る人が細い絲を絲取女に誂へた。で、女は極く細い絲を紡いでやつた。所が其人は『憊んな絲ぢや駄目だ。俺にはもつと〜極く細い絲が要るんだ』といつた。女は『もし、これが貴方に細くないと仰有るなら、ほれ、貴方に他のをあげましやう』と言つて空處を指差した。其人が見えぬぢやないかといふと、女が『それは、あなた、絲が餘り細いので見えないのです、私にさへ見えませんもの。』

馬鹿者は喜んだ。そして其の『細い絲』を最つと多く誂へた。そして其爲めに多くの代價を拂つた。

### 二 一番美味しい梨

一人の主人が僕に一番美味しい梨を買つて来いと命じた。僕は果物屋へ行つて梨を呉れと言つた。で、商人は彼に梨をやつた。所が其僕は『いや、私に極く宜いのを呉れ』。商人が言ふには『まあ、其處で一ツ喰つて御覧なさい、美味しいのが解りますから』。すると僕は『でも、たつた一ツ喰つて見た所で、凡ての梨の味が何うして解らうさ!』と言つて、彼は凡ての梨を残らず少しづつ喰つて見て、其を主人に持つて行つた。と、主人は大に怒つて彼を逐ひ出した。

### 三 百姓と瓜

或時、一人の百姓が畑へ瓜盗みに行つた。彼は竊と瓜の傍へ這ひ寄つて暫く考へた。俺は此の瓜を持つて行つて賣るんだ、そして其の錢で牝鶏を買うんだ、すると牝鶏が卵を生んで暖めて雛を澤山孵やす、で俺が其雛を育て、賣つた其錢で豚を買ふと豚がやがて子を澤山生む、其豚の子を賣つて今度は牛を買はう、其牛がまた子を澤山生んだ所で、俺が其を飼つて又賣る、そして今度

は家を買はう、そして畑を作らう、畑を作つて瓜を植ゑやう、それから盗ませないやうに嚴重に番人を置かう、さうだ、番人を雇うて瓜を守らせるんだ、そして俺が時々畑の傍を見廻つて恚う叫ぶのだ、『オ、イ、番人!よく番をしろ!』と、百姓は其時實際、聲一杯で叫んだ。

所が其所に見張つて居た番人が其聲を聞いて突如飛び出して來て百姓を擲りつけた。

### 四 猿と豆

猿が兩手に一杯豆を持つて居た。

突然一つの豆が手から落ちた。で、猿はこれを拾ひ上げやうとして今度は二十ばかりの豆を零した。彼は急いで又それを拾ひ集めやうとして、とうとう皆な零して了つた。

そこで猿さん、ふん／＼怒り出して豆を残らず放ッ散らかして、サツサと逃

げて行つた。

## 五 穀倉の鼠

穀倉の縁の下に一匹の鼠が棲んで居た。

其穀倉の床に小さな穴があつて穀物が始終其穴から落ちるので、鼠の生活は大分宜かつた。所が彼は自分の豊かな生活を一つ誇つて見やうと思つて、穴をもつと大きく噛み擴げて置いて、他の鼠共を招びに行つた。そして曰ふには、

『僕の處に遊びに來給へ、みんなにうんと御馳走してやるから。』

で、彼が他の鼠共を連れて來た時、見ると穴が全く無くなつて居る。

それは百姓が床に大きな穴の開いて居るのを見付けて其を塞いで了つたのだ。

## 六 兎と獵犬

兎が或る時獵犬に向つて言ふには、

『君は僕等を追つかける時、何故吠えるんかね？ 若し黙つて追駈けたら、もつと早く僕等を捕へることが出來やうにさ。君が吠えたつて唯僕等を獵師の方へ追つたてるだけのことぢやないか。そりや僕等の逃げてゐる場所が獵師に解れば獵師は僕等の方へ走つて來て撃つさ。しかし君には何も呉れやしないよ。』  
犬は答へた、『いやさ、己はそれで吠えるのぢやないよ。己はな、お前達の臭を嗅ぐと直ぐに怒つて吠え出すのさ。今直ぐ己がお前を捕へるのだなと思ふと、たまらなく嬉しくなつて、思はず吠えるのさ。然し、自分ぢや、何故吠えるのか分らないが何うしても吠えずにや居られないのだ。』

## 七 財産の分配

二人の子供を有つて居る父があつた。彼が子供等に曰ふには『おれは、もう死ぬから、お前たちは財産をみんな半分づゝに分けて取れ。』

父が死んだ時に子供等は財産を分けるに就て争ひ始めた。而して彼等は裁判

して貰ひに隣人の處へ行つた。で、隣人は子供等に一體お父さんはお前達に何と言つたのだと問ふと、彼等が曰ふには『お父さんは財産をみんな半分わけにしろと言ひました。』

隣人が曰ふには、

『そんなら有りツ丈の衣服を半分に裂いて、有りツ丈の器具を二つに打ち毀して、それからまた家畜も一匹のこらず半分づゝ切り裂いて了へ。』

兄弟は隣人の言ふ通りした。そして彼等は何も得ずじまつた。

#### 八 二匹の馬

二匹の馬が二つの荷車を引いて居た。前の馬はよく引くが、後の馬は我儘で立止まつたきり歩かなかつた。で、後の馬から前の馬へ荷物を積み替へた。

みんな積み替へてしまふと後の馬は軽やかに歩き出した。而して前の馬に言ふには、

『うんと勉強して見い！ 澤山努めれば努める丈手前苦しむばかりだから。』

宿屋へ来た時に主人は曰つた。

『おれは二匹の馬を飼ひながら一匹にばかり曳かせるとは何のことだ。それよりも一匹にたんと飼料を遣つて、他のは潰しにせう。そして皮でも取らう！』  
で、その通りに爲た。

#### 九 猿

或人が林へ行つて木を切倒してそれを大きな鋸で挽き始めた。彼は木の端を切株の上に載せて、馬乗りになつて挽いた。やがて彼は挽いた處へ楔を差し込んで置いて、また挽いた。暫くするとまた楔を抜き取つてもつと深く押込んでまた挽いた。

猿が樹の上に坐つて其を見て居たが其人が一と休みと寝轉んだ時にのこゝと下りて来て其の木の上に馬乗りになつて、同じやうに遣つて見やうとして楔

を抜き取つた機會に尻尾をピッタリ挟まれてしまつた。

さア猿さん、痛い痛くないのつて、キャツ／＼聲を立て、叫び出した。で、人が目を醒まして下りて來て猿をどやしつけた。そして、しまひには繩で縛り付けてしまつた。

#### 十 狗と鶏と狐

狗と鶏と旅行に出かけた。晩になると鶏は樹の上に眠就いたが、犬はその樹の根元に蹲つて居た。夜中頃鶏が鳴き初めた。其を聞いた狐は早くも駆けつけて來て、下から聲をかけた。

先づ鶏に遇つて、斯くも美しい聲を持つてる鳥に是非尊敬の意を表したいと願つた。『では、先づ門番から起さなけりやなるまい、門番は樹の根方に寝てるよ』と鶏に言はれたので狐は其を探さうとして吠えだした。と狗がつか／＼と躍り揚つて狐を締め殺して了つた。

#### 十一 自慢の因果

都に修學した子が田舎の父の許へ歸つて來た。恰度勞働の時期だつたので、父は草刈支度をして、子供と一緒に連れて行かうとした。『鎌を探つて、草刈にでも行くべ、俺の手助けにはなるし、自分の愉快にはなるしサ』と父がいふと、『鎌ツて何だ？ 草刈ツて何の事だ？ 我輩にはそんな百姓語は解らん、愉快も何もあつたものぢやない』と、學者氣取の子は雙手を脊にまはし、首を動めかし、勿體らしく歩を移し乍ら斯う答へた。

それはいゝが、足許にある鎌にも氣付かずに躓まづいて額を打つた。『こんな所に鎌を放り投げて置く馬鹿があるか』と額に手を遣り乍ら學者氣取の子が怒鳴つた。

### 三 書簡三則

(最初に掲ぐるはトルストイ伯が八十回誕辰の祝賀に關して、親友チエルトコフ氏に自分の意見を述べた書簡である。)

今日準備せられつゝある誕辰日の祝典は、余に取つて非常の苦痛である。それには多くの理由がある。先づ第一に、余はまだ此種の祝典なるものには些の同情をも表したことがなかつた。余の信ずる所によれば、人の行爲に對する同情は、決して外部的に表はされるものでない。思想及感情が一致和合することに依つて始めて表はされるものである。余は記憶してゐる、今から丁度三十年前、プーシキンの銅像除幕式の時に、親愛なるツルゲーネフは態々余の所に立寄つて、余と一緒に大詩人の除幕式に臨席しようとして誘つたことがある。その當

時はツルゲーネフが余に取つて如何に貴く、如何に親愛であつたにせよ、又余はプーシキンの天才を如何に尊敬し、如何に高く評價したにせよ、余は其時斷乎として臨席することを斷つた。その爲にツルゲーネフが非常に立腹したといふことを聞いたが、然しどうすることも出来なかつたのである。その當時からもう此種の祭典が余に取つては、何となく不自然なものに見えたからである。さうはいふものゝ、決して虚偽なものとは思つてゐない。唯余の精神的要求に應じないやうに思はれるばかりである。而して今や此事が余自身に關するやうになつては、殊に痛切にそれを感じるわけである。

然し、これは最後の理由であつて、更に他の最も重要な理由といふのは、此の祝典が既にその準備の際に多數の人々の間に余に對する悪感情を惹起してゐるといふ事である。若し祝典がないものとすれば、是等の悪感情は發しないで済んだのであらう。



是等の悪感情を惹起した動機は矢張余自身にあるのだ。余は此點に於て自ら罪を負ふものである。余は圖らず、峻嚴酷烈なる言を以て他人の信仰を審判し、譴責した點に於て餘りに不注意であつた。余は今になつて、始めて深くこの事を懺悔する。然しながら懺悔は事實その物を改めるものではない。既に半身墓の中にあるやうな余にとつて、最も望ましい事は、人々と相愛の關係にありたいと云ふことである。此の相愛の感情を以て人々と永い別れをしたいものである。然るに、誕辰日の準備が却つて人々の心中に、余に對する反感の情を惹起したのである。これが余の最も苦しく思ふ所である。假令余の尊敬する多くの人々が、余に向つて如何なる讚辭を呈するとも、一人の者が嫉妬を以て余に對するやうなことがあれば、余は多數の讚辭を斥けて、一人の嫉妬の増長しないことを望むのである。

二

(トルストイ伯には其生前能く狂熱な露國の修道士仲間から脅嚇的の手紙や葉書が舞込んだが、一兩年前亦莫斯科の或る修道女(尼)から斯う云ふ脅嚇狀が伯の手許に達した。)

リョフ・ニコラエキチよ！ 貴下は能くも神を誹謗するやうな文書を公にして一向憚る様子がないが、若し妾に相當の権力があつたら、貴下のやうな祖國を呪ふ國賊、正教を危ふする教敵は疾くに射殺して丁ひ、貴下の異端邪説を信奉する徒輩は殘らず酷刑に處するのですが、惜い事には妾に夫丈の権力が無い。

(之に對してトルストイ伯は次のやうな返書を書いた。)

貴女に於て神命を忠實に遵奉せんとする眞の宗教家を見たのを私は甚だ嬉しく思ふ。神命を遵奉すべき點に於て私は貴女と一致する。既に此の主要なる點に於て一致する以上、我々は精神上の交通が出来る。だが、其他の點に於ては我々は互ひに見解を異にして居る。私の考へでは、人間は至善の生活を以て世に處し、惡を避けて善を積んでこそ眞に神の意を體したものと云へる。其他の點に於て神の氣に入らんとして人間の爲せる一切の事は唯だ一の迷ひである。

虚偽である。人生の眞の目的と相距ること遠しだ。然し、至善の生活は決して一朝一夕に達し得らるゝものでない。假令一步たりとも善に進まんが爲には不  
斷の努力と緊張せる注意力とが必要である。夫故に人は他の詰らぬ事に其力を  
費やすことなく、少しでも善くなるやうに其全力を用ひなければならぬ。神は  
既に人が倫理的に完全にならんが爲に要する所の凡ての物を與へ給ふた。即ち  
我々を惡より豫防せんが爲めに良心を與へ、善惡を識別せしめんが爲に理性を  
與へ給ふたのである。

### 三

(確か、昨年のもつたと思ふ。露國正教派の一僧侶が會て教會から破門された翁に一番を裁し、再  
び教會に立返ることを勸告すると之に對する伯の返書が斯うだ。)

何卒私に構つて呉れるな。私をして餘生を暫らく今の儘に送らしめて呉れ。  
自分では自分を地上に遣はした神の御旨の何れに在るかは解つて居るつもり

だ。若し私の見解が間違つて居るとすれば、神は私を此儘には措いて置かない  
だらう。私は眞理の何たるを表白し、又誤謬をドシ／＼指摘するけれども決して  
他人を強ふるやうなことはしない。眞理を受けると受けないと人々の勝手  
だ。由來各人にはそれ／＼長い精神的過去がある。又各自獨得の認識作用を備  
へて居る。而して此の精神力は非常に複雑なもので、決して他人の干渉を許さ  
ないものだ。だから私は決して自説に他人を強ふるやうなことはしない。何卒  
私に對しても同じやうにして呉れ!

#### 四 杜伯金言抄

##### 一 宗教の意義

あらゆる宗教の本義は一語に盡さる。即ち『我は何故に生活するか、我を圍繞する無限の世界と我との關係は如何』といふ問題に答ふるにある。

○  
外界の觀察に由ても將た自身の經驗に由ても人は、宗教と云ふものが自然界の不可知力に對する迷信的恐怖心から起る崇拜でないといふことを知ることが出来る。この迷信的崇拜は單に人類發達の一定の時期に於て見る所の現象に過ぎない。之に反し宗教なるものは恐怖心や人類發達の程度とは全く關しない。如何に文明が進歩するとも宗教は決して破滅することの出来ない或物である。何故なれば、人間は無限世界の中に自己の有限を自覺し、又自己の罪即ち爲せ

ば爲し得られる事及び爲さねばならなかつた事を爲さなかつたと云ふ自覺を有する。此の自覺が應て宗教であつて、是れは人間が人間として存する限り過去、現在、未來を通じて永久に消滅すべきものでない。

○  
人類は既に其發達の二期即ち宗教的時期と形而上學的時期とを經過して今や第三の最高期——科學の時期に這入つたと認められて居る。随つて人類の間に於ける諸種の宗教的現象は、曾ては必要であつたが最早や遠い昔に其意味と效用とを失つた馬の第五指と同じく人類の精神的機能の殘骸に過ぎないものと認められて居る。

○  
基督の教に據れば、人生とは惡に對する奮闘である。理性と愛とを以て惡に對抗することである。

## 二 人生の意義

人生の意義は地上に神の國を建設するにある。即ち自愛的な、嫌忌すべき、脅迫的な不合理な生活の代りに、愛ある、自由な、合理的な、同胞的生活を建設することに努力するにある。

○

人生の終局の目的は到底人間に解らないとは言へ、兎に角人は自分の天職の存する人生の最も痛切な事業が何であるかを知つて居る。この事業とは世界の不和分裂に代ゆるに一致和合を以てすることである。

## 三 科學の意義

中世紀に於て科學と稱せられ且つ最も重要な事業と思惟されて居たものは煩瑣哲學フステカであつたことを吾人は知つて居る。して、今尙ほ吾人は此の煩瑣哲學フステカを嘲笑する。

○

現代の科學が瀑布のエネルギーを利用して、その力を工場に應用し、又は山嶽に墜道を開穿した事などを吾人は大いに自慢し、且つ喜こんで居る。然し、吾人は瀑布の力を一般公衆の利益に使用せず、之を以て少数資本主の富の増殖を圖り、或は殺人の器具を製造して居る。山腹に墜道を穿つ爲に用ゆる其ダインマイトを吾人は戦争に使つて居る。而して戦争を止めやうとは更に思はないのみか、日夜戦闘の準備に忙殺されて居る。

科學の任務は救世済民に在る。

## 四 教育の意義

人が此世に生を享くるは完全にならんが爲である—是れはルーソーが言つた偉大なる言葉であるが、此語は恰も大盤石の如く、確固不拔の眞理である。

○

聖書の教育的意義を否定して、聖書の時代は経過したと言ふ者には、然う言はして置くが可い。そして彼等は宜しく自然界の現象を説明して、聖書に對抗する程の書籍や物語を、或は世界史より或は想像力より案出して見るが可い。其時吾人は聖書の時代が経過したといふ言に同意しやう。

### 五 藝術の意義

今日同胞主義と近者に對する愛の感情とは漸く社會の善良な人士だけの專有物となつて居るやうな有様であるが、この感情を總ての人の習慣的感情となし本能となすやうにするのが藝術の本領である。

○

眞の藝術は良人に愛せらるゝ妻の如く、更に扮飾を施すの必要を見ない。似而非藝術は賣笑婦の如く、常に盛裝を凝らして居らねばならぬ。

### 五 著作年表

『幼年』……………	一八五二年
『地主の朝』……………	一八五二年
『コザック兵』……………	一八五二年
『襲撃』……………	一八五二年
『少年』……………	一八五四年
『伐木』……………	一八五四—五五年
『セバストーポリ物語』……………	一八五四—五六年
『青年』……………	一八五五—五七年
『兩騎士』……………	一八五六年
『王突數取人の回想』……………	一八五六年

『雪嵐』……………	一八五六年
『分遣隊にて莫斯科の知己と邂逅』……………	一八五六年
『アリベルト』……………	一八五七年
『リュツェルン』……………	一八五七年
『家庭の幸福』……………	一八五九年
『三つの死』……………	一八五九年
『ポリクレーシユカ』……………	一八六〇年
『ホルストメーデル』……………	一八六一年
『教育に関する諸論文』……………	一八六二年
『十二月黨』……………	一八六三—一七八年
『戦争と平和』……………	一八六四—一六九年
『少年用小話集』……………	一八六九—一七二年

『アンナ・カレニナ』……………	一八七三—一七六年
『我が懺悔』……………	一八七九—一八二年
『人は何に由て生活するか』……………	一八八一年
『通俗小話集』……………	一八八一—一八六年
『獨斷的神學の批評』……………	一八八一—一八六年
『四福音書』……………	一八八一—一八三年
『幸福とは何ぞや』……………	一八八二年
『我は何を信ずるか』……………	一八八三年
『教會と國家』……………	一八八三年
『簡易聖書』……………	一八八三年
『十二使徒の教訓』……………	一八八三年
『何を爲すべきか』……………	一八八四—一八五年

- 『イワン・イリイチの死』……………一八八四——八六年
- 『馬鹿者イワンの話』……………一八八五年
- 『闇の力』……………一八八六年
- 『光のあらん限り働け』……………一八八七年
- 『人生』……………一八八七年
- 『生と死と』……………一八八七年
- 『人生の意義』……………一八八七年
- 『文明の果實』……………一八八七年
- 『相互の勞力と知的行爲』……………一八八八年
- 『ボンダレフ著作の序』……………一八八八年
- 『神に關する思想』……………一八八八——九〇年
- 『ニコライ・バルキン』……………一八八九年

- 『人は何故に酩酊するか』……………一八八九年
- 『クレイツエロワ・ソナタ』……………一八九〇年
- 『藝術に關する思想』……………一八九〇——九二年
- 『神の國は汝の中にある』……………一八九一——九三年
- 『第一步』……………一八九二年
- 『書簡集』……………一八九三——九四年
- 『モーパッサン集序文』……………一八九四年
- 『エミール抄序文』……………一八九四年
- 『宗教と倫理』……………一八九四年
- 『主人と下男』……………一八九五年
- 『三個の比喩』……………一八九五年
- 『基督教徒と國家』……………一八九六年

- 『三戦争』……………一八九六年
- 『基督教の精神』……………一八九七年
- 『藝術論』……………一八九七—九八年
- 『復活』……………一八九九—一九〇〇年
- 『現代の奴隷』……………一九〇〇年
- 『性欲問題』……………一九〇一年
- 『宗教と信仰と祈禱』……………一九〇二年
- 『宗教とは何ぞや』……………一九〇二年
- 『一兵卒の日記』……………一九〇二年
- 『一士官の日記』……………一九〇二年
- 『労働者へ與ふる書』……………一九〇三年
- 『傳道者へ與ふる書』……………一九〇三年

- 『世の終り』……………一九〇六年
- 『シエクスピヤ論』……………一九〇六年
- 『黙する能はず』……………一九〇八年
- 『田園の歌』……………一九一〇年
- 『村の三日』……………一九一〇年

(以下未刊行の著作)

- 『ハッヂイ・ムラーツ』
- 『司祭セルギイ』
- 『夜會の後』
- 『廣造手形』
- 『死體』
- 『ティホンとマラニヤ』



## 六 著作統計

(千九百八年の調査)

### ▲発行高

『全集』	八、〇〇〇
『高架索の囚人』	二五、〇〇〇
『主人と下男』	二五、〇〇〇
『人は何に由て生活するや』	一五、〇〇〇
『闇の力』	一四、〇〇〇
『神は義を愛す』	一三、〇〇〇
『人は多くの土地を要するや』	一三、〇〇〇
『セバストーポリ物語』	一三、〇〇〇
『最初の醸酒者』	一二、〇〇〇

『復活』	一一、〇〇〇
『三つの死』	一一、〇〇〇

### ▲諸外國の翻譯書數

獨逸	二〇〇
英吉利	一七五
佛蘭西	一五〇
瑞典	五〇
丁抹	五〇
支那	三〇
日本	三〇
日韃	三〇
印度	三〇

▲翻譯の始めて試みられた年

希臘	.....	一八七〇
英吉利	.....	一八七五
供蘭西	.....	一八八七
獨逸	.....	一八八七
支那	.....	一八九五
古希伯來語	.....	一八九二
チウワク語	.....	一九〇六

偉人トルストイ伯終

明治四十三年十二月二十九日印刷  
 明治四十四年一月一日發行

偉人トルストイ伯  
 (實價金六拾錢)

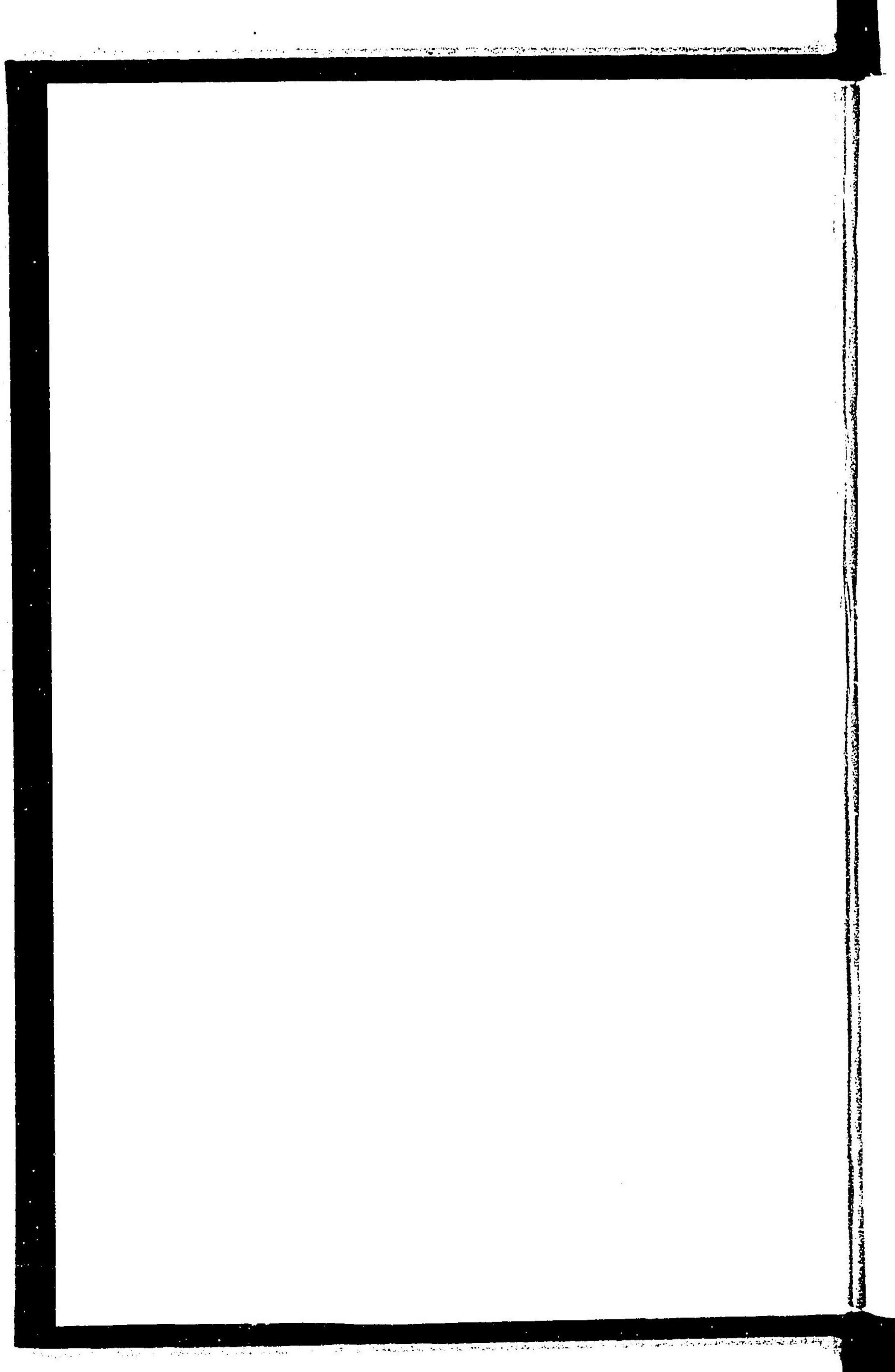


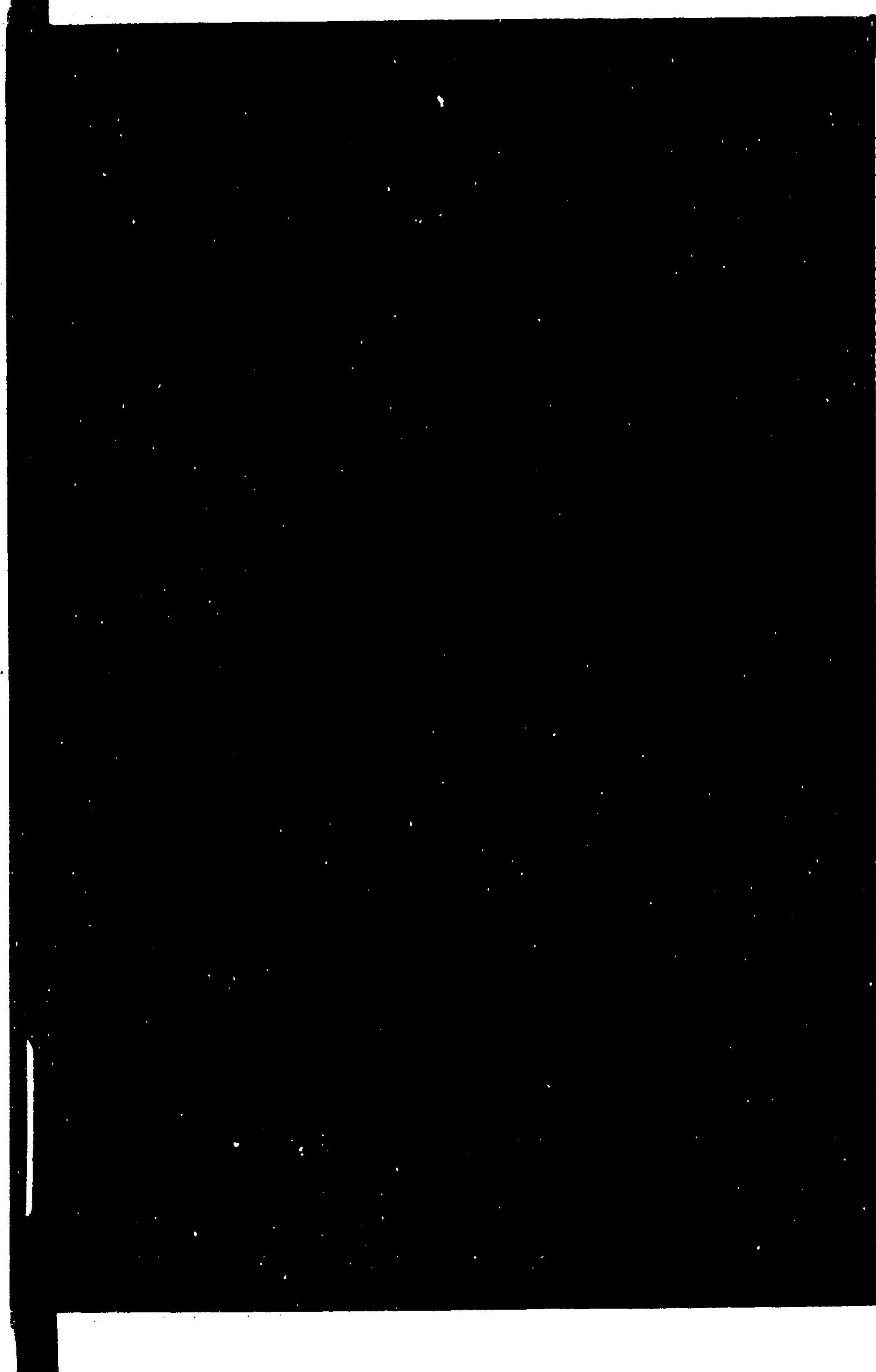
著作者 昇 直 隆  
 發行者 和 田 靜 子  
 印刷者 中 野 鐵 太 郎  
 印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社  
 發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地 春 陽 堂

電話本局五十一番  
 接替口座東京一六一七

IT-6R-64







332  
38

084678-000-5

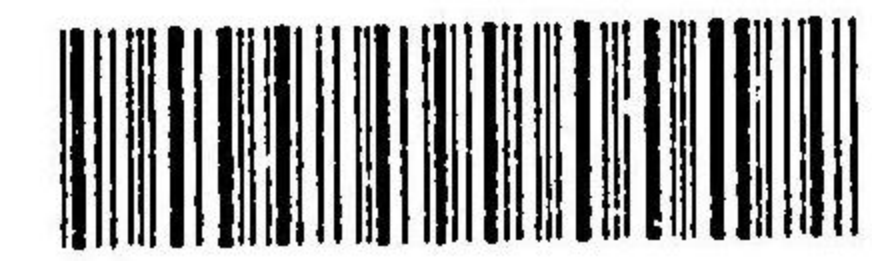
332-38

偉人トルストイ伯

昇 曙夢 (直隆) / 著

M44

DBA-0001



10/10/1917



Vertical text on the left side of the page, possibly a page number or header.

